

帰国報告

シカゴ日本人学校での教育実践

前シカゴ日本人学校

現札幌市立石山中学校 西山 昇

1. はじめに

政治・経済・文化あらゆる面で日本とのつながりが深く、情報量が最も多い国のひとつといえば、アメリカ合衆国であろう。アメリカに限らずどの国も相互に依存し合っているのが今日の世界であるが、情報の発信が昔ほど一方的でなくなったとはいえ、その影響はいまだ大きく、歴史的ななかかわりを考えても、実に因縁深い国といえる。

そんなアメリカ合衆国のシカゴ日本人学校に私は平成15年4月から18年3月までの3年間在外教育施設派遣教員として勤務した。



世界中の大都市では大抵そうであろうが、シカゴでも街のあちこちで日本の物を見つけることができる。大手のスーパーでは必ず日本の食品が置いてある。醤油はもちろんインスタント食品から、種類は少ないがお菓子まである。スーパーに寿司があるのは当たり前で、質さえ問わなければどんな町にも和食レストランが一つか二つは必ずと言ってよいほどある。テレビでは日本のいくつかの番組を英語に吹き替えて放送していた。書店に行けば少年漫画雑誌の英語

版さえあった。日本製漫画の単行本の書棚はどの書店でも充実し、「アニメ」の雑誌もかなりの数に上る。シカゴ近郊に1件ある日本の書店に行けば、日本のオタクよろしくコスプレ風の格好をしたアメリカの若者が漫画やDVDのコーナーあたりをうろついていた。電気製品、コンピュータ、自動車などの雑誌を見れば日本製品が満載で、電気店に行けば、日本の製品があふれている。車は40%が日本車だといわれていたが、実際には60%近くが日本車ではないかと思えるほどだ。想像を遙かに超えて日本の物は受け入れられている。これが実感だ。日本の物はCoolでHigh Quality そんな認識が当たり前のように感じられた。

私がアメリカで直接出会う人たちは日本人に好意的な人が多かった。日本人に面と向かっているのだからお世辞もあるだろうが、アメリカ人に限らずどの国からやってきた人たちも好意的に接してくれた。職場はもとより、地域（パーク・ディストリクト）で移民や英語に不自由している人たちのために、ボランティアで運営している英語の読み方教室（Read to learn class）や英語教室（English as Second Language class）で出会った先生達や級友、街で出会う人々みんなそうだった。物だけでなく人の交流も盛んになり、日本についての情報量も増えてきたことが大きいと思われる。アメリカの場合特に、多くの企業の方々が進出して地域社会に溶け込んでいることや、日本人大リーガーが増えて、大いに活躍していることなども少なからず影響していると思う。アメリカ社会への貢献や日本人の顔、人としての関わりを数多く知ってもらうことの大切さを痛感する。自分が思っていた以

上に“日本”が浸透し受け入れられている。これが私の実感だった。

日本では、アメリカのマスコミが、ものすごくセンセーショナルに日本を否定的に扱うかのごとき報道ばかり見ていたので、少々面食らった。アメリカのマスコミは日本のダメなところばかり取り上げてはいないし、取り上げていても扱いはものすごく小さい。私が見聞きする限り、そろいもそろって日本を否定的に扱うようなことはなかったと思う。日本がどう受け入れられているか日本で報道する時、日本のマスコミは極端に自虐的になる傾向があるのではないだろうか。

しかし、シカゴダウタウン中心部から、国道90号線に沿って10分ほど南に下ると、このような思いも吹き飛ばしてしまうような大きな看板を、いやでも目にしてしまう。物事には多様な面がある。少なくとも裏表の両面がある。日本に対するアメリカの考え方もまた同じだ。

私が着任して間もなく、日本人学校の研修会でシカゴ大学に行った帰りのこと、次のように書いてある看板が目飛び込んできた。

America
DEC.7.1941 will not SEP.11.2001
Forget!



アメリカのある種の人たちにとって、日本の真珠湾攻撃はあの9・11のテロといまだに同じ扱いをしなければならぬ程のものなのか。日本はアメリカと戦争をした国であり。アメリカは日本に先制攻撃を受け、そのことを忘れてはいないのだとその看板は言っている。そ

こを通るたび、その看板は、そんな当たり前の事実を、いくつかのアメリカでの被差別体験と共に思い出させ、何気なく過ごすアメリカでの日常生活に、冷や水を浴びせかけられる思いがした。

2. シカゴの地理とその歴史

シカゴは、ニューヨークとロスアンゼルスに次ぐアメリカ第三の都市である。人口はおよそ300万人、周辺地域の人口を含めると770万人に達するという中西部最大の都市である。街の東側はミシガン湖に面し、イリノイ州の北東に位置している。イリノイ州の別称が、“The Prairie State”というだけあって、車を郊外へ走らせると、果てしなく平坦な土地が延々と続く穀倉地帯が広がる。

先住民族との戦いを終えた後、シカゴは西部開拓の入り口として栄え、鉄道や運河など交通の要所として発展を遂げてきた。現在も世界最大の発着数を誇るオヘア空港を抱え、全米一の交通の要であることに変わりはない。

南北戦争以後、軍需物資の生産、穀物や家畜の取引、農業機械の生産などで、目覚ましい発展を遂げたシカゴであるが、1871年には大火に見舞われる。その後、高層建築が盛んに建てられ、シカゴは摩天楼発祥の地として知られていくことになる。摩天楼というとニューヨークが真っ先に思い浮かぶが、その発祥は意外にもシカゴだったということである。大火後、驚異的なスピードでなされた復興は、建築家や芸術家に多くの活躍の場を与え、現在はダウタウン個性あふれる数多くの建築やモニュメントを残すことになった。

20世紀に入り、アルカゴネに代表されるマフィアが暗躍する時代が余りにも有名なため、シカゴというと犯罪をイメージする人が多いが、むしろそのような歴史があったからこそ、現在のシカゴとその近郊は(ダウタウン周辺の一部地域を除いて)、治安が良く、大変に住

みやすい都市になっているのである。

その他、20世紀になってこのシカゴを中心に発達し、世界の文化に大きな影響を与えたものにシカゴ・ブルースやジャズなどがあり、シカゴ美術館やシカゴ交響楽団など文化的な施設や団体も多く、この街はイベントも数多く行われる文化活動の盛んな街として有名である。



住宅地は道路も庭先も豊かな緑をたたえている。一軒一軒の住宅のまわりには広い庭があり、芝生が植えられていて手入れが実によく行き届いている。歩道の脇や公園などの公共施設、会社のまわりなどあらゆる所に必ずといってよいほど芝生が植えられていて、どこも手入れは欠かさない。これらの予算はどこからどのように出ているのか。芝生にこれだけの労力とお金をかけて大丈夫なのかと変な心配をしながら、いつも感心して見ていた。また、街ごとに大きな森林保護区を擁し、手つかずの自然を満喫することができた。そのためか、私の住んでいた地区にも、街のあちこちに野生動物がひっきりなしに顔を出していた。リスやウサギは当たり前で、家の裏ではアライグマを目撃したことがあるし、鴨やグースなどの野鳥はそこらじゅうにいて、公園で遊ぶ時にはその糞に気をつけなければならないほどだった。学校には鹿が来たこともあるし、同僚の家の床下にはコヨーテが巣を作ってしまう、業者に移動させてもらったこともあった。

加えて、町ごとに一つか二つゴルフ場をもっているため、アメリカの中西部はどこも緑溢れ

んばかりであった。環境保護にそれほど熱心といえないアメリカではあるが、それでも自然の残し方や環境の整え方はは実にくまなく、住環境の良さは日本の比ではない。

異国に暮らす以上、生活の様々な面で不便を感じ、トラブルが絶えることはなかった。生活している時は、当然ストレスを感じないではいられなかったが、それでもシカゴ日本人学校があるシカゴ周辺地域は、この上なく恵まれた環境にあり、住みよい所だったということは言えよう。

3. アメリカの教育事情

(1) 生活指導から見たアメリカの中学校

アメリカの中学・高校で起きる事件や映画、テレビドラマに映し出される学校の様子から、私達日本人の多くは勝手に作り上げたアメリカの学校のイメージを持っている。服装に制限はなく、ルーズで自由気ままなそのイメージは、日本の学校生活を批判する際の論拠にされることさえある。しかし、少なくとも実際に生活したアメリカ中西部シカゴ近郊で、中学生を間近に見たり学校訪問を試みた限り、そのイメージは、現実とは大きくかけ離れ、かなり歪められたものに思えた。実際に見聞きする中学生の様子は、礼儀正しく、流行に踊らされた服装をする生徒はごく稀で、見た目にもきちんとしていた。放課後は家で宿題をするか地域のスポーツ活動に明け暮れているということで、地域の格差が相当程度あるにしても、この地で暮らす一般的な日本人が見聞きする学校や生徒の印象は、日本で作り上げられているイメージとは大きく違う。特に、毎日の宿題の量は半端なものではなく、現地校にかよう日本人の子ども達は毎日悲鳴を上げながら勉強しなければならないと聞く。

次に私は、1年目のプラムグローブ中学校への訪問、そして2年目のラングストン・ヒュー

ズ小中学校，3年目のバー小学校への訪問をもとにアメリカの中学校における教育事情を，生活面を中心に述べてみたい。

プラムグローブ中学校

プラムグローブ中学校がある地域統合学校区第15区は，シカゴ郊外の北西地域にある。約75%を白色系住民，約15%がヒスパニック系，そして約8%がアジア系の住民が占めるこの地域は，2003年に教育分野で唯一の受賞団体として大統領から National Quality Award の表彰を受けている。数ある学校区の中でも特にこのプラムグローブ周辺は，落ちついた住宅地で，平均所得も高く教育熱心な家庭が集まっているという。



校内の問題行動について質問してみたところ，問題行動はほとんどないしあったとしても専門のカウンセラーや教頭・校長が対処するので，教職員は心配をせずに教科の指導に専念できるという答えをいただいた。

ハンドブックと規範

アメリカの中学校では，入学時に保護者と生徒を対象に装丁のしっかりとしたハンドブックが配布される。その中の，服装の規定一つ取ってみても，実に具体的で事細かな規則がある。アメリカでは全く自由と思われている服装でさえそうなので，その他のルールも数が多い。学

校諸施設の使い方，保護者，生徒はもちろん職員の権利義務，出欠や補習の手続き，登下校のバス利用法，安全対策その他，写真やビデオの取り扱いや PTA の活動，指導記録に関するもの等々，諸々の取り決めが事細かに記載されている。

その後には，さらに事細かで具体的な懲罰の規定が続く。タバコ，アルコール，薬物，武器に始まる生徒禁止行為の記載、そしてさらに続くのは、禁止行為への違反や生徒としてふさわしくない行為があった場合の規則上の基準，すなわち懲罰・処分・指導の段階が11に渡って列挙されている。その中には，教室からの排除や特別教室への隔離，代替校（オルタナティブスクール）への異動など，厳しい内容の処分が列記されている。

このプラムグローブ中学校のハンドブックと，日本の生徒手帳を比べる時，あたかも日本の中学校には何の問題も心配もなく，事細かな取り決めなど全く必要ないかのように見えるほど内容があっさりとしている。しかし，日本の中学校で生活のきまりや生活の指導に対して批判はつきものであり，日本の教師は様々な問題行動に苦慮しながら対応し，模索を続けながら日々の指導を行っているのが現実なのは知ってのとおりである。

ラングストンヒューズ小中学校

2年目はこのプラムグローブ中学校とは対局にあるといえるラングストン・ヒューズ小中学校を訪問した。この学校は，ダウンタウンの南側の貧しい住民の多い地区にあり，周辺の雰囲気もすさんだ感じで，生徒の80%が家庭に問題を抱え，うち8人はホームレス。しかも，生徒の半数が何らかの形で養護施設に関わっているという。校長先生は，学校で抱える問題のほとんどは，根本的に家族の問題であるとお話されていた。

生徒たちの登校中に到着した日本人学校職員

一同は、気持ちよく訪問を始めることができた。ほぼ全員が黒人のこの学校の生徒たちは、全員が日本語の授業を取っており、われわれと会うとみんな元気な朝のあいさつを日本語で交わしてくれたのである。気持ちの良いあいさつを元気に交わして、1日を始めることの大切さに、国の違いがないことを実感したしだいである。



この学校の授業は40分授業で行われ、基本的な授業はreading, social, math, spelling, scienceであり、曜日によってJapanese, gym, Libraryが行われる。日本の昼休みのような長い休み時間はない。

ダウンタウンの教育困難校であれば、さぞ賑やかでけじめに乏しい授業が展開されているものと勝手に想像していたが、いくつかの授業の参観をして見て、どのクラスも静かに集中して授業を受けていたのには驚かされた。施設設備の予算は十分なものでないと思われたが、お金をかけられないなりにきちんと整理整頓され、学校全体としても大変に落ち着いた雰囲気を感じた。この落ち着いた雰囲気を作るために、生活指導上どのような点に気を付けているかとの質問に、先生たちは以下のように応えてくれた。

class rulesやdisciplineを大切にしている。(基準は各教師に任せられる教室にもruleの掲示物があった。)

家庭の事情とあわせてやっていく。(貧しい地区は、子育ての感覚がないとやっていけない。落第したりするのは親戚や祖父母

が面倒を見るような子が多い。)

子ども達の家族の様にあるいは一緒に行動をするように心がける。

指導の際には、きちんと約束をさせ、責任を持たせることで生徒は良くなっていくことが多い。

月に一度、成績優秀な生徒や生活態度のよい生徒は表彰を行う。(その生徒は校長と一緒に写真を撮ったり賞状をもらったりする。)

子ども達が来なくなるような学校づくりに努める。(家から学校に逃げてくる子がいる。)

学習環境を整え教師一人一人が子供の面倒をしっかりと見る。(caring)

学校に適應できない子には、その子に合う学校を薦める。(中には他の学校をいくつも転々とする子がいる。)

どうしても感情的に不安定になる生徒はソーシャルワーカーやカウンセラーが面倒を見る。

ケンカをした時には5～10日の停学。

(年間6～7%の生徒。ケンカで卒業できないということもある。)

ふだんの生活で落ち着かない子や問題を起こす子は、フィールド・トリップには連れて行かない。

参観の途中、低学年の子供たちが食堂に向かう様子を見た。食事は食券を買って食べるのであるが、子供たちは勝手に食堂に向かうのでは



なく、クラス毎に教室から静かに並ばせられ、前を向いて、人差し指を口に当てたまま、ずっと無言のポーズを取らせられながら食堂に向かっていたのが印象的であった。アメリカでこんなことまでやらせているということが意外な驚きであった。

ラングストンヒューズ小中学校では、小沢一郎氏の支援によって日本語教育が行われているという。年間15名の生徒たちが日本に招かれることを励みに、生徒たちは熱心に日本語を学んでいるのである。日本語教育の効用としては、生徒たちの異文化理解的な態度を身につけさせることをあげると共に、二人の日本人教師が行う日本語教室では、規律を重んじ基本的学習態度のを身につけさせることを大切にしているので、ふだんの生活態度を向上させる働きがあるとの説明を受けた。国際理解を深め、豊かな国際性を身につけることは大変に重要である。しかしそのような教育は、その土台となる日常生活をきちんと整えた上で、行われなければならないことをこの学校訪問では強く印象づけられた。

パー小学校

3年目に訪問したパー小学校は、ダウンタウン中心部近くに位置し、周囲の危険はやや少ない学校区となっている。通学生徒はほとんどがヒスパニック系の家庭で、スペイン語を主言語としていると言ってよい。全家庭のうち85%が貧困家庭で、保護を受けている。そのため、この学校は学区に関係なく通えるマグネット・スクールであるにもかかわらず、それほど生徒が集まっておらず常に予算不足に苦しんでいるという。実際、体育教師を雇えない、スクールバスがないなどの問題を抱えているとのことであった。

朝9時、1日の始業はアメリカ国家の放送で知らされる。基本的には教室の自席で直立して敬意を表さなければならないことになっている

が、遅刻して廊下を生徒移動中の生徒が、立ち止まり、国歌の放送が終わるまで直立不動でいる様子が印象的であった。ほとんどが移民で、アメリカに暮らしながらスペイン語を主言語とする生徒がほとんどであるという特殊事情もあり、アメリカへの忠誠がことさらに強調されるものと推察された。

この学校でも独自の特色ある教育として、日本語教育を行っていた。テキストは特になく、カリキュラムは現在シカゴの公立学校の日本語教員が集まって系統立てたものにまとめているとのことで、流暢な日本語を話す美人のアメリカ人教師二人とシカゴ大の日本人留学生である臨時教員が協力して教材作りを行っていた。

アメリカでも特殊な教育よりも英語や算数などの基礎学力を強化すべきと言う声も多いが、パー小学校が日本語教育を推進する理由として以下の5点をあげてくれた。

発音がスペイン語と似ていて言いやすい言語である。

マンガ、食べ物、車など子どもにとって身近で興味深い文化がある。

グローバルな文化的視点が持てる。

多言語を学ぶことで他教科の学習意欲も高められる。

高校で学ぶためのアドバンテージがある。

(地域で一番の高校で日本語を教えている。)



フラッシュ・カードを使った単語学習や実践的な日常会話の授業を参観したが、子どもたち

は熱心に、また大変に礼儀正しく授業を受けていた。日本語のクラスでは特に、日本の学校のように起立した上で礼をして始まり、礼をして終わるという形で授業が行われている。ラングストンヒューズ小中学校同様に、生徒の生活態度を向上させるため、こういう点も日本語を学ぶ利点としてあげることができると思われた。この学校でもすべての教室にclass rulesの掲示物があった。アメリカの各教室はその教室を使う担当の先生のオフィスでもあるので、そのルールは一人一人の先生の最低限の方針であり、それを守らない生徒がそのまま許されることはありえないのは既に述べたとおりである。

アメリカの生活指導 ～まとめとして～

「ゼロトレランス」という教育施策がある。これはアメリカの公教育を立て直した「寛容度ゼロ」「毅然とした対応」などと訳される方式であるが、ただ単に「寛容度ゼロ」というと、それによって、学校生活に適應できない生徒を教室から排除する非人間的なものと捕らえてしまいがちである。しかし、この方式の厳しいのはその基準と適用であり、教師と管理職、指導担当の専門家の徹底した分業で、生徒を立ち直らせるための制度であることは、忘れてはならないと思う。ハンドブックや段階的な罰則で、代替校行きを命じられれば、専門家が矯正指導をするなど、とことん面倒を見るというのがその本質ということである。

教育先進校といわれるプラムグローブ中学校でも、ラングストン・ヒューズ小中学校のような教育困難校でも、そしてもちろんその中間に位置づけられるパー小学校でも、学校として規律を重んじ、その規律を維持するためにはきまりとそれを守れなかった時の罰がはっきりとしている点には共通点が見られた。この3校が、地域や家庭そして学校の状況にかかわらず、大変に落ち着いた状況にあるのは、この「ゼロトレランス」によるところが大きいのである。

アメリカの教育事情を日本にそのまま当てはめて考えることはできないし、学校訪問や現地で過ごした3年で見聞きできたことには限りがある。なおかつ、ふつうの学校に適應できなかった生徒が行くことになるオルタナティブスクールも見学できなかったため、単純な比較はできないが、社会的な生活を営む上で必要な最低限のきまりが明確で、それに背いた時の取り決めがあるが故に、自己の責任がはっきりし、秩序だった印象が強いのはアメリカの学校のように思える。



二十年ほど前、日本できまりの見直しが行われた時、確かにそのきまりには批判され、嘲笑さえされて仕方のない内容があったことは事実である。しかし、その昔きまりの簡略化が行われた際には、社会生活を営む上で最低限必要なマナーやルールを規定することまでやめてしまったように思えてならない。日本では生徒や親、職員にはどんな義務と権利があり、ルールを守れない時にはどう責任を取らなければならないのかを考える事はあまりしてこなかった。私たちは、生徒の義務やそれを守れなかった時の責任を明確にし、その上で、生活のきまりを見直し、学校で本当に厳しくすべきことや家庭や地域で行われるべき教育をもう一度考え直す必要があるのではないだろうか。

ラングストン・ヒューズ小中学校とバー小中学校を参観をしていて、もしこれほど家庭的に困難を抱える子供たちの割合が多い学校が日本にあったら、このように落ち着いた学校が維持できるかどうか疑問に思った。また、学校の生活の中で本当に厳しくすべきことというのは何なのかについて、もう一度問い直していく必要も強く感じた。



ダウントウンではない、地域社会に目を転じると、私が見た限り、日本のようにコンビニや街頭にたむろし、(たとえそれが塾だとしても、)夜遅くに子どもだけで徒党を組み徘徊するような姿や、大声で闊歩しながら公共マナーに反する態度をこれ見よがしに取る生徒は、見なかった。学校区格差が相当あり、夜が危険で外出がままならない地域もあるというアメリカの事情や私自身がアメリカの実状に疎いを差し引いて考えるとしても、学校や地域での行いも常識的で、放課後に地域主催のスポーツに勤しみ、夜には家でたくさんの宿題をこなすアメリカの生徒の姿に家庭と地域の教育力の高さを強く印象づけられた。

これはやや別の問題にはなるが、地域による教育予算の格差は気になって仕方がなかった。今回訪れたプラムグローブ中学とその他の二つの学校では、校舎そのものや施設設備にかけられているお金が見た目に違いすぎるのだ。聞くところによれば、学校への教育予算の配当は、その学校区における固定資産税の税収で決まるという。貧しい地域で一人あたり25万円程度、

豊かな地域になると、実にその3倍以上の80万円から90万円にもなるという。貧しい地域の子供達のがんばりを見るにつけ、教育予算に限らず様々な面で見られるあからさまな格差に、私は複雑な思いに駆られた。

(2) 日米の教育の比較

アメリカの公教育 1960年代以降の流れ

次に、アメリカと日本の教科教育の比較から双方の教育事情について考えてみたい。

加藤十八著「ゼロトランス」によれば、1960年代から80年代にかけて、アメリカでは束縛から解放へと向かう非管理教育が推し進められてきた。中でも60年代は、極端な形で社会の変革が進み、人種差別や女性の地位向上など社会的に良い変化をもたらした反面、古き良き伝統を破壊する結果ともなり、学校教育を大きく混乱させていったのである。

この混乱を立て直すために取った措置がさらに事態を悪化させていく。リベラルな学者達が教育の「人間化論」の名のもとに、革新的な教育改革運動を起こしたのだ。一連の学者達によれば、伝統的で管理的な教育体制を廃していけば、生徒達が人間性を取り戻して、学校が良くなっていくというのだ。しかし、結果は全くの逆になってしまった。すなわち学力と規律の極端な低下を招くだけだったのである。これがまさしく、私が持っていたアメリカの学校のイメージとなっていたものといえるが、そこで行われていた代表的なものに、現在日本で行われている「総合的な学習」の原型ともいえるコミュニティ探求の活動がある。当時は学校を離れコミュニティに出て学ぶことこそ意義があるとされたが、学校の規律と学力の低下を招くだけで大失敗に終わることになったという。日本では生きる力を育むとして、問題解決型の授業を総合的な学習の時間で行わせているが、アメリカの先例から学ぶべきを学んでおく必要はある。

「ゼロトランス」はこのような惨状にあえいでいた学校の規律を回復するために導入され、瞬く間に全米に広がって成果をあげているのだ。教科教育の立ち遅れ、学力の低下については、その打開策の一環として州統一テストが実施されていることがよく知られ、カリキュラムの変革も図られているが、私はアメリカの一人一人の先生達も、教科の力を生徒に身につけさせるため、地道な努力を続けていることを現地の研修の中で知った。次に、このようなアメリカの教員達の研修会について触れてみたい。

日米算数教育研究会をとおして

～日本の「研究授業」への注目～

シカゴ日本人学校では、イリノイ州デュポール大学の高橋昭彦教授を中心として企画されている日米算数教育研究会に会場を提供し、公開授業と授業の研究討議を行った。この会には全米からたくさんのアメリカ人の先生達が、日本の算数教育から何かを学ぼうと参加していた。

アメリカの教員は、勤務時間内の研修が認められていない。このことが、教員の指導技術や質を高める上で大きな弊害になっており、このような研修会も有給の時間外に、熱心な先生達が、身銭を切って参加するのだという。また、研究授業というものが存在しないため、日本で行われているような研究授業のしかた自体が注目され始めたという。日本で行われている研修が十分なものか、その時間やシステムを有効に活用しているか疑問も湧いてくるが、日本の教員は、大いに恵まれていると思った。

日米算数研究会をとおして、私は日本の教育のすぐれた一面を再認識させられた。高橋教授によると、アメリカのある研究団体が日本、アメリカ、西ドイツの学校の授業を無作為に統計的に有意な数だけ抽出し、その発問を全て英語に訳し、数学者たちに分析させたところ、数学的に意味のある発問の発問全体に占める割合多かった発問は、圧倒的に日本の授業の中に多

かったのだという。すなわち、日本では学校教育の中で問題解決型の授業を定着させ、当たり前のこととして行っており、「生徒に投げかける発問」「文章題を効果的に使う方法」「要点を簡潔にまとめる方法」「子供達の声を練り上げ、まとめ上げるやり方」など授業を行う基本的な技術の高さが証明されたというのだ。さらに、現代教育の重要な教育理論を生み出してきたのは、アメリカの学者達であるが、それを実際の学校現場で研究し、実践しているのは圧倒的に日本の教員の方が多く、アメリカでは、生徒に考えさせるのではなく、ただ単にわかりやすく説明して繰り返し練習させるのがよいという固定観念にとらわれ、昔ながらの古い方法で授業を行っている教師がほとんどだということであった。

新聞を開けば何かと批判にさらされることの多い日本の教師であるが、私達は自分達のやっていることにもっと自信を持ってよいのだと励まされているように感じてならなかった。

日米教育の比較 ～まとめとして～

日本の中学校では、長い間受験のための知識獲得型の授業が問題とされてきた。しかし、日本の教師達は日々の実践や研究の中で、いかに児童生徒に考えさせるかを工夫し、教科の学習の中で問題解決型の授業を行ってきた。その成果が認められ、教え方のノウハウをアメリカの教師達が学ぼうとしていることの意味を、もっと私たちは知る必要がある。

アメリカの公教育はその歴史的な成り立ちから民主主義の担い手たる市民の育成ということを大きな目標としているという。そのために自分の意見を相手に理解させ、批判的かつ論理的に考え、行動するためのスキルを幼稚園から高校までに身につけさせ、各教科の中で段階的に習得させていく。教科の学習内容はそのようなスキル獲得のための道具ということすらできるといっているのであるが、そのため先に述べたよう

な極端な手法で教育の変革を試み、60年代から80年代に失敗を招いたこともあった。しかし現在は、規律ある学校生活の中で基礎学力を充実し、そのようなスキル獲得との融合を図っていく方向にあるといえる。教科の教授法に関わる技術的な側面以外の部分で、日本が学ぶべきものがあるとするれば、30～40年前のアメリカの教育ではなく、今のアメリカの教育の流れの中にあるように思える。すなわち、生活の基本をただし、学習の基礎基本を定着させながら、民主主義の担い手として将来にわたって生かすことができる能力、スキルを高めていくということである。

(3) 地域の文化体育活動

アメリカでは、学校教育とは別に、地域の文化体育活動が大変に盛んである。日本では体育文化振興会の名の下、社会体育が行われていることになってはいるが、学校に任せきりになのが現状であろう。アメリカには、学区とは別に定められた施政区のパーク・ディストリクトがあり、その主催で地域の活動が行われる。季節ごとに各家庭に送られてくる地域のイベントや文化的・体育的習い事を掲載したプログラムガイドは分厚く、小さい子からお年寄りまでを対象に、いろいろな種類の文化教室やスポーツ教室がかなりの数紹介されている。スポーツで言えば、野球、バスケットボール、フットボールはもちろん、サッカー、バレーボール、ホッケー、水泳、テニス、ゴルフ、空手、柔道、ダンスなど実に幅広い種目から選択し、格安料金で参加できる。

指導は地域のボランティアが行うため、質の高い指導が期待できない場合もあるようだが、高いレベルを要求したい場合は、上のレベルの活動の場も別に用意されているとのことである。何よりも地域の活動であるため、子どもにとっては学校とは違う社会とのかかわりの場が保障されていることは、アメリカの教育事情の

長所としてあげることができよう。また、そこでのコーチングは、子ども達の動きひとつひとつに声をかけ、褒めることを主眼とし、参加者全員が活動を楽しめるように工夫されている。

毎回の送り迎えはもちろん、練習も多くの人たちに見守られながら行われ、スポーツの試合となれば、家族総出の応援となり、子ども達は地域のみんなに見守られ、自分の好きなことに打ち込んでいることを実感する。使用している各学校の施設、地域の公園施設の充実ぶりもさることながら、このような社会教育のあり方が「青少年の健全育成」に果たす役割には大きなものがあるだろうと推察された。

フレックスタイムで朝早くから仕事に向かい、3時～4時には仕事を切り上げて、家族とともに活動するボランティアのために家路につく親たち。そのため、3時頃から道路の渋滞までおきてしまうアメリカの社会。学校とは違う人間関係の中で、子ども達を見つめ、認め、関わり合うこのような地域の教育環境が、家庭と学校の教育と組み合わせられながら子ども達を社会に溶け込ませ、成長させる大きな力となっていると思われる。

3. シカゴ日本人学校の様子

(1) シカゴ日本人学校の設立と歴史

シカゴ日本人学校の現地名は「シカゴ双葉会日本語学校」という。「日本人学校」では入学できる人間を日本人に限定してしまうため、アメリカでは「Japanese School」という言葉を「日本語学校」という意味で用いなければならないのだ。「双葉会」の名は、初代会頭が故事「梅檀は双葉より芳し」に因んで設立母体を命名したのだと、早川昇事務局長に赴任時の研修でうかがった。

企業のアメリカ進出が活発になり始めた1950～60年代、滞在が長期化する駐在員の悩みの種は子どもの教育問題だった。それは現在

でも変わらないものの、当時は日本語力を維持するための教育機関がなく、親が子どもの教育に責任を持つ他なかったという。

そんな中、シカゴの駐在員達は子女教育への熱意と持ち前の行動力でアメリカで4番目の補習校をミシガン湖畔の教会を借りて設立した。

文部省からの教員派遣もないため、より充実した学校を目指して、シカゴの日本商工会議所と双葉会が総領事館の協力の下、自らの費用で日本からの教員を招聘したのが1973年のことであった。

児童生徒数が増加するに伴い、校舎探しが大変に難しい問題だったという。いくつかの校舎を転々とし、ある大学校舎を間借りした時には、5階と7階の教室を使用し、教師朝会が階段踊り場、集会は玄関ロビーという状態だったそうだ。その他、エレベーターは使用禁止のため、低学年も重いカバンを下げて長い階段を上り下りし、足もつかない椅子に、顔も隠れんばかりの机での勉強しなければならないなど、数々の不便を余儀なくされたと聞く。登下校時には送り迎えの自動車が周辺道路に溢れ、近隣住民からの苦情もかなりの数に上った。

補習校を設立して10年ほどを経て、現地校への適応困難の克服、帰国後の進学に備えての日本語による学力の向上を期して、シカゴにも日本人学校全日校をとという声が次第に高まっていった。こうして1978年、アメリカではニューヨークに次いで2番目となる文部省認可の全日制日本人学校開校の運びとなった。

全日校では、校舎の一部を低学年用に改修したり、様々な遊具をそろえ、補習校との校舎併用も可能となったため、借用校舎の苦勞がなくなったという。しかし最初の校舎はスコキー市の住宅街にあり駐車場も狭く、送り迎えの自動車をはじめとして何かと反感を買うことが多かった。当時の経済的な進出に伴うジャパン・バッシングと相俟って、校舎の窓に生卵や石をぶつけられたり、車に傷をつけられることもあったため、自家用車通学から、保護者の自主運

営による通学バス方式を取り入れることにしたという辛い歴史的経緯もうかがった。

このような苦難の歴史を経て、校舎はナイルス市、アーリントン・ハイツ市と移転し、児童生徒が安心して学校生活を送れる現在へとつながっていくのである。



(2) シカゴ日本人学校の教育

平成18年シカゴ日本人学校の設立母体である双葉会は創立40周年を迎えた。その時中村泰章校長は是非ともスクールバスのミニチュアを記念品として残したいと言われた。その背景には以上のような先人の苦難の歴史があった。すなわち、その歴史的経緯をスクールバスに象徴させて、記念品としたわけである。

シカゴ日本人学校の下校は小学部1年生から中学部3年生まで、そのスクールバスで一斉に行われる。このため、授業は全学年毎日6時間授業ということになっているので、週の授業時数は小学部4年生以上で30時間ということになる(低学年は放課後の遊びの時間が入る)。ここでは、シカゴ日本人学校全日校で行われていたいくつかの活動を紹介したいと思うが、当然のごとく、基本はあくまでもごく普通の、当たり前前の授業にある。“シカゴ日本人学校の設立と歴史”のところでも述べたように、全日校設立趣旨は現地校への適応困難の克服、帰国後の進学に備えての日本語による学力の向上にあったのであり、現在も日本の教育課程に基づいて、

日本国内と同様の教育が受けられるということが基本路線であり，保護者の皆さんも国語を始めとする基礎学力を伸長し，日本人として必要な基礎的な能力を身につけていくことを期待して全日校へ入学させている。このことは，特に基本中の基本を身につける小学校の段階において重要であり，それらの力を中途半端にしないで日本国内と同等の教育を受けることが，日本人としての骨格をしっかりと身につけることに結びつくというわけである。国際理解あるいは異文化理解的な教育や現地の特色を生かした教育は，きちんとした土台ができた上に築かれなければならないのだ。シカゴ日本人学校では週30時間という潤沢な授業時数をフルに活用し，教育活動を推進している。

(3) 交流学習と英語学習

国際理解としての活動に交流学習がある。私自身は図工・美術，技術科の専科教員として配属されていたことから，残念ながら直接参加することはできなかったが，シカゴ日本人学校を特徴づける活動の一つとなっているので，いくつかの資料や横から見学させてもらった経験をもとに紹介させていただく。



シカゴ日本人学校の交流学習は各学年ごとに相手となる現地校が決められる。相手校は学校区の教育委員会から割り当てられるもので，こちらから相手校に出向く“GO”が2回，こちらにその学校を招待する“COME”2回，原

則として合計4回が実施される（学年や状況によって回数が変わることがある）。



計画の段階で各児童生徒にパートナーが割り当てられ，活動によっては，さらにいくつかをまとめてグループを作る。自分達で活動の説明をしたり，現地校生徒のサポートをするという個別の動きをすることによって，お互いがより深く関わり合えるように考えられているのだ。

また，“COME”の活動の各場面では，割り当てを決め，日本人学校の児童がペアとなって，英語と日本語による全体への説明や進行を行う。大勢のアメリカ人を前に英語の説明を行うということで，子ども達にはプレッシャーもかかっているようであったが，練習を重ね，自信を持って大きな声で行い，それぞれの表現力を高めていた。

“COME”のプログラムは，日本文化の紹介をたくみに織り交ぜながら，楽しく活動できるように，各担任の先生たちが，シカゴ日本人学校で受け継がれて来たものをベースにしながら，適宜工夫を凝らして作成していた。例として小学校1年生のものをあげてみる。英語科の先生達の手助けを受けながら周到に準備を重ねる英語，あいさつや案内，音楽に工作，ゲームと運動などありとあらゆる表現の形態を駆使し，パートナーとの個別のコミュニケーションを苦勞して行い，自分自身で何とかしていくことが，活動の基本になっていることが分かっていただけだと思う。

小学部 1 年生 第 1 回交流学習 (COME)

1, 現地校来校	出会いのあいさつ パートナー探し ロッカー, 会場への案内
2, 歓迎の会 (図書室)	児童による司会(英語と日本語) 歓迎のあいさつ(英語と日本語) 歓迎の歌(英語の歌)
3, 折り紙 (図書室)	折り方の説明(英語と日本語) かぶと, ねこ, いぬ など 記念撮影
4, 学校探検	探検の説明(英語と日本語) 学校中を使って日本のアニメ のキャラクターを探す。
5, 玉入れ (体育館)	玉入れの説明(英語と日本語) 日本独特の競技である玉入れ を, 現地校日本人学校混合の 2 チームで行う。
6, ランチ	パートナーと共に食事を取る。
7, 昼休み	パートナーと一緒に遊ぶ。
8, 紙芝居	英語と日本語によるお話。 パートナーと共に聴く。
9, お別れの会	児童による司会(英語と日本語) お別れのあいさつ(英語と日本語) お別れのインタビュー(英語の歌)
10, お見送り	駐車場に出て, 相手校のスク ールバスを見送る。 後片付け。

学年が上がるにつれ、ひとつひとつの活動はより大掛かりになり、難しさを増していく。児童生徒の手にゆだねられる部分が大きくなり、日本の文化や伝統的な活動をより深く詳しく説明しなければならなくなるのだ。例えば中学部となると歓迎のセレモニーでは文化祭などでも発表している「よさこいソーラン」を踊り、その後は習字、伝統遊び、剣道などをブースに分けて各担当者が説明から実演までを、責任を持って行う。日本についての知識がない人たちに、英語で説明しなければならないだけに、子ども

達は、自分たちの文化を真剣に学びなおし、英語にも一段と磨きをかけていく。

“GO”の時には、相手校が特別なプログラムを組んでくれる場合と、現地校で普段行われている様々な授業や活動に、参加させてもらう形で行われる場合がある。数年で帰国するにしても、長期滞在などの理由で将来的に現地校に行くことになるにしても、現地校の通常の授業を受けるという経験も、それはそれで貴重なものとなっていたように見受けられた。

シカゴ日本人学校の様々な活動には、保護者の方々のお手伝いをお願いしている。以下の文章は、“GO”の交流学習に参加した小学部2年生の保護者の方々のものであり、これをもってこの交流学習についてのまとめとしたい。

『(前略)全日校と異なり、(日替わりの)時間割はなく、毎日同じパターン(時間割)の授業をします。体育も毎日あります。教科書は学校が所有し、授業ごとに各児童に「貸し出し」されます。このため、教科書は学校に置き放しで、家に持ち帰ることができません。(中略)一日の終わりなどに先生がよく本を読んでもくれます。その時には、児童が先生の周りに集まって直接床に座って話を聴きます。教室の一部に絨毯が敷いてある場所があり、先生が本を読んだり、大事な話をする時などは、よくそこに児童を集めます。(中略)少し緊張して始まった交流会でしたが、クラフトの作業中など遅れているお友達を手伝ってあげたり、足りなくなったのりやテープを探してあげたり、私たちは手を貸すことがほとんどなく、みんな立派にこなしていました。きっとそれぞれが何かを得られたことと思います。みんな、次回を楽しみにお別れしました。』

『先日の交流学習で、私は始めて現地校を訪れました。(中略)はじめに相手校の子ども達が「こんにちわ」と一斉にあいさつしてくれたことで、こちらの子ども達の緊張も解けたように思えます。交わす言葉は少なくとも1年生の時より、自然に接しているように見えました。

工作の作品は、アメリカの文化に触れるもので、両国の子ども達、皆楽しそうでした。

ランチタイムで、アメリカの子ども達のランチが想像していたよりも簡単なものでびっくりしました。日本人のお弁当は、芸術的であると思いました。通常は教室ではなく、ランチルームで食べるというのも日本の学校との違いを感じることができました。国を超えて「同じこと」「違うこと」を体験するということは、今後の成長に素晴らしい影響を与えるものだと思います。今回の訪問が、子ども達の心に残るものであったらよいなと思います。』

英語の学習

英会話（英語）の授業は、現地採用のアメリカ人教員と1名の派遣教員によって行われる。アメリカに着いたばかりの児童生徒と長年アメリカにいる生徒、あるいは現地校で英語で学校生活を送っていた経験のある生徒では英語力の違いが甚だしいことを考慮し、英語科の授業は能力別の少人数クラス編成で実施されている。もともと20人前後の学年を3つのクラスに分けて授業を行うため、この英会話の授業は1クラスが5～7名で行われるという大変内容の濃いものとなる。授業は週3時間行われ、日本から来たばかりの児童生徒には日本からの派遣教員である英語科教科主任や米国生活の経験が豊かな現地日本人教員が懇切丁寧な授業を行い、その上のクラスからは力に応じて現地理解教育的内容を盛り込んだ教材でアメリカ人教師が授業を行っていく。子ども達はさすがにアメリカに住んでいるだけあって、英語で行われる授業を自然に受け入れ、どんどん力をつけていく。英語検定は小3～中3までを対象に年3回行っているが、小学6年生で準2級、中学2・3年生で2級を取ることも珍しくない。何よりも、文法的な難易度や段階には関係なく、耳にした英語がすぐに使えるようになっていく子ども達の様子に、たいへん驚かされたものである。

1～3年生の（6校時にあたる）放課後の遊びの時間は、本来は担任指導による遊びの時間であり、英語の時間ではないのだが、英語科スタッフをより有効に活かし、子ども達が英語に触れる機会を増やすという趣旨で、担任ではなくアメリカ人の教師によるイマージョン教育的遊びの時間を行うことにした。担当の英語教師は理解しやすいように心がけながら英語のみの指示や呼びかけで子ども達を遊びの世界に引き込んでいく。これは、子ども達が楽しく自然に英語を身につけていくよう工夫を凝らした活動であり、始まったばかりの取り組みなので、どのような成果をあげていくのか楽しみなところであるが、とにかく子供達は歓声を上げながら英語で楽しく遊んでいた。



これも本来の英語科の学習ではないのだが、小学部の必修クラブの時間に英語科現地採用教員の先生がクラフト・クラブなどを担当してくれることもあった。自分の好きなことを異学年の人達とアメリカ人の先生に英語で教えてもらい、英会話を楽しみながら作品を作る。何という贅沢な英語の学習ではなからうか。

いわゆる日本の教育課程に基づく中学部の英語科は、「英文法」として週3時間ほど行い、その他の英語の授業が「英会話」という名目で3～4時間行われていた。この「英会話」では、どのような授業が行われているだろうか。内容は実にバラエティに富んでいるが、ここでは一つの例として私が見学したライアン・クリスティ先生の授業を取り上げてみたい。この授業は、

アメリカのハロウィーンの時期に合わせて、アメリカあるいはシカゴならではの教材を使いながら、次のような内容で行っていた。

シカゴのある劇場は、この街で最も SPOOKY（お化けが出そうで薄気味悪い）な場所だと実際に言われている。それはなぜか。シカゴがその昔大火に見舞われたことは、「地理と歴史」のところでも述べたとおりであるが、SPOOKYといわれる理由はその大火と大火後に再び起きたその劇場の火災によって引き起こされた悲劇にあった。その劇場は、建築予算を惜しんだが故に火災警報装置や非難経路が不完全なものとなり、シカゴ大火の教訓を生かせず、劇場内で多くの人命を奪うことになってしまったのだ。

授業は、当時の新聞や歴史的な資料などを用いながら、なぜ今だにそのような場所として有名なのかを、生徒達自身に謎解きをさせていくものであり、アメリカの風習や、シカゴの歴史と今の様子、社会問題などを絡めながら英語を駆使して進めていく、実に見事な内容であった。

この他にも、後に述べるアース・デイの集会や近隣の協会訪問、文化祭の発表、ハロウィーンの集会、春休みの英語講座など英語科が主催して行う行事は実にバラエティに富んだ内容であることを申し添えておきたい。

（４）現地の特色を生かした教育

先に述べた交流学习と英語の授業もまさに現地の特色を生かした教育に違いないが、その他に現地ならではの活動として、アメリカの祝祭日に合わせた行事がある。どの国にも祝祭日があり、それはその国の文化や歴史を色濃く反映しているものであるが、アメリカはそれをかなり極端に表現し強調する国である。祝日が近づけば、商店でアメリカ国旗を大量に売り出し、至る所国旗であふれるその様は、日本人の感覚からすると、行き過ぎとも思えるが、いろいろな国からの移民を受け入れてきたこの国では、それが当たり前のことであり、そうしなければ

国が成り立っていないという現実があるのだろう。

毎週木曜に行われる朝会の中で、月に一度現地採用の英語科教員による、その月の祝祭日を説明するスライドショーの集会が行われる。その中でも特に大きな行事については1コマ～2コマの時間を割いて集会や関連した活動を行っていた。

例えば、アース・デイという日は、休日ではないものの地球環境のことを考えるための祝日になっている。この日の前後どちらかの木曜日には、かつてシカゴ日本人学校の英語科教員だったアロンソン先生がやって来て、いろいろな実演や実験を交えながら児童生徒達に環境保護の大切さを実感させる集会を行っていた。また、児童会ではこの集会とリンクさせながら、空き缶収集のキャンペーンを行い、そこで上がった収益で、自然保護団体に寄付をし、アメリカ中の学校と連帯して森林を買っていくという運動を行い、毎年表彰を受けていた。



教科教育の中にも現地理解のための学習が数多く見られる。まず真っ先にあげなければならないのが、米国社会である。この教科はアメリカで私立学校としての認定を受けるために必要な教科で、アメリカ人教員あるいは、アメリカ在住の日本人の指導の下、まさに子ども達が生活している現地、アメリカの地理や歴史について学習するものである。

次に、校外学習として日本人学校で設定されていたもののうち、主だったものを表で紹介し

てみよう。

学年	活動内容	行き先
各学年	春の校外学習	動物園・公園など
	秋の校外学習	同上
	水泳教室	公設屋内プール
	スケート教室	公設スケートリンク
	スキー教室	スキー場
2年生	買い物探検	地域ショッピング
3年生	街の探索1	図書館・駅周辺
	街の探索2	スーパーマーケット
	街の探索3	消防署
	街の探索4	警察署
4年生	環境の学習	リサイクルセンター
	工場見学	パン工場
	教会訪問	近隣教会
5年生	教会訪問	近隣教会
中学部	現地理解	工場見学

お年寄りに英語の歌をプレゼントをする4・5年生英語科主催の教会訪問では、子ども達の歌声に涙を流すお年寄りがあり、毎年手作りのクッキーをごちそうになった。体育の授業である水泳、スケート、スキー学習は、アメリカでは学校の教師ではなく専門のインストラクターに教えてもらうため、体育の授業であると同時にその人とのふれ合いがあり、英語の学習にもなったりする。どんな活動にせよ、これらアメリカあるいはシカゴならではの現地の特色を生かした活動には。人とのかわりが生まれ、それだからこそ現地理解教育としての意義が生まれるのだ。

ハロウィーンからクリスマスにかけてのシーズンはアメリカに住む多くの人にとって最も大切な期間といえる。この時期小学部の1年生と中学部の生徒がジャコランタン作りをおこなっていた。校外の農家から大きなカボチャを買ってきて、お化けカボチャのランタンを作るのである。また、日本人学校ではその両方の祝日に向

けて大きな集会を持ち、アメリカの風習や習慣を学んだ。特にハロウィーンでは、みんなで仮装し、保護者も参加しておおいに楽しんだ。ただ単に知識として覚えるのではなく、体験と共に学ぶ活動といえようか。ちなみに、私も図工・美術教師の名にかけて腕をふるい、毎年手作りの衣装で参加していた。

その他、例えば図画工作の授業を例に取れば現地ので集めた自然物物やアメリカでしか売っていない材料を使って日本の指導要領に乗っ取った授業をするなど、一つ一つの授業や活動の中にアメリカならではの工夫が。数え上げればきりが無いほど盛り込まれていた。

(5) 小中併置が生きる様々な行事

日本人学校では様々な場面で小中合同あるいは小学部や中学部ごと全学年がまとまって行う活動がある。ここではそのいくつかを紹介してみたい。

先にも述べたとおり、登下校はスクールバスで行われるが、バス・ルートは方面別に分けられ、中学生がルート長を勤めて人数の把握や、乗車の指導を行う。バスの運転手さんは当然アメリカ人であるため、時には運転手さんの通訳も務めなければならない。バス避難訓練では、下級生の世話にあたり、万が一の時には人員の安全確保に一役買う責任のある仕事だ。



小学部ではバス・ルート別に、学期に数回は遊びの集会が持たれる。この時は6年生がリー

ドして、下級生から遊びの希望を取り、1年生から6年生までがみんなで楽しく遊べるように工夫しながら会を準備し、進行しなければならない。



小中合同の大きな行事としては、春の運動会と秋の文化祭がある。運動会では、中学生は中1から中3まで学年の別なく一緒に競技を行うし、恒例となっている白組赤組対抗の応援合戦では、小1から中3までの全学年をまとめる重要な役割を担う。応援合戦では伝統的なエールの他に、その年だけのオリジナルダンスや振り付け、さらには手作りの大道具・小道具で運動会を大いに盛り上げる。それだけに、練習には熱がこもり、中学部の生徒達の小学部児童へのリードがたいへん重要になるのだ。練習がうまくいった時の上級生としての喜びの声、うまくいかなかった時のみんなへの投げかけが、下級生の士気を左右する。また、小さなからだ全体で必死に声を出し、からだを動かす小学生の姿を見て、中学生はさらに頑張るといふ具合に、互いが互いを高めあうのだ。

文化祭では、美術科や技術科の作品は、全学年一斉に発表され、お互いに鑑賞しあう。下級生の生徒達は自分たちがこの先どんな作品を作っていくのかを学び、上級生はその名に恥じぬ立派な作品にしようがんばりを見せる。同じことは、ステージの発表にも言うことができる。特に小学部1、2年生のステージはかわいらしく、それだけで見応えがある上に、元気いっぱいパワフルで見事だ。そんなステージに負けな

いように、上級生達も一生懸命に頑張る。上級生の質の高いステージを見て、逆に下級生も大いに楽しみ、刺激を受ける。例えば、中学生が繰り広げる“よさこいシカゴそーらん”のステージを見た小学生は、その迫力に圧倒され、感激しながら、自分たちも中学生になったらあんな風にステージで踊ってみたいと考え、6年生はそんな期待を持ちつつ中学部へ進学していくのである。

フィナーレでは全校生徒が閉会式で合唱し、祭りを締めくくる。曲の決定から練習、そして閉会式での歌へと流れる当日の進行など、その企画も中学部の生徒会が中心となって行う。文化祭前になると、中学生は分担して小学生の朝の会に、歌練習の指導に出向く。慣れないながら、一緒に歌練習を行うのだ。当日はリーダーとなる生徒達がステージ上で、そしてその他の生徒達が歌声で小学部をリードしなければならない。



どんな行事でも、中学部では1年生から3年生まで、縦割りの小グループを編成し、取り組んでいく。限られた時間の中で、異学年の集団が学びあっていくのだ。その他、中学生の朝のあいさつ運動、朝の運動、小中共に朝会、生徒会活動、委員会活動は縦割り異学年集団で活動していくものは枚挙にいとまがない。

小学校の高学年や中学生が、小さな低学年の子供達の面倒を見たり、小学生の子ども達が中学生を頼りにして活動していくことは、大きな子供達には、特別な責任感を持つことにつなが

っているし、小さな子ども達には、温かな人間関係のもと安心して学校に通える雰囲気を提供している。様々な活動を通してチームで一つのことを成し遂げる喜びや、人と人がつながっていくことの大切さを学んでいく子ども達の様子や、小さな子の面倒を見ることで、大人の振る舞いを身につけていくことが何とも頼もしい限りである。

(6) グローバルな子供達

日本人学校の校風や特色を考える時に忘れてならないことに、子供達のグローバルな経験がある。子供達に限らず、日本人学校に関わる人々は、日本の出身地も様々で、駐在経験が複数ある人が多い。インドネシア、マレーシア、シンガポールなど東南アジアにいたことのある子供たちは特に多く、その他にも西ドイツやアメリカの他都市など複数で長年にわたる駐在経験が当たり前である。海外経験も豊富であれば、出身地も日本全国様々で、帰国先もまたバラエティに富んでいて、当然のように全く違う環境への転校経験も多い。そんな経験が子供達の友達同士の付き合い方や学校生活の送り方に良い影響をもたらしていたと思う。



子供達の中には、言語や生活習慣の違いからコミュニケーションがうまく取れないため現地の学校になじめず、日本人学校の全日校に転入してくる児童生徒もいる。しかし、そんな子供達も日本人学校でみるみる元気を取り戻していっ

た例を3年間のあいだでいくつも見る事ができた。言葉が通じるようになるのであるから、当然とお考えになる方もあろうが、一方で、一人一人をありのままに受け入れ、どんな子にもやさしく接することができるシカゴ日本人学校の子供達や集団としてのすばらしさを忘れてはいけないと思う。

当然けんかがあったり、言い過ぎて人を傷つけたりしてしまうようなこともあった。これは、人間どうしであれば当然起こってしまうことであり、人と人の付き合いの中で、関係を修復していけばいいだけの話だ。しかし、集団で口裏を合わせて、一人の子を攻撃したり、弱い立場の子供を強い立場にあるものがいたぶったりすることは話が別だ。このようないわゆる“いじめ”は、シカゴ日本人学校の子供達の中には起こらなかった。

年度末に発行している作文集に、その年に転入してきた生徒のこんな作文がある。

『(前略)シカゴ日本人学校に来て、ビックリしたのは、何より「積極性」があることだ。小学生から中学生まで、先生に言われたことをきちんとこなして、誰かに命令されるわけでもなく、「はい」と大きな声で返事をする。授業中も自分から発言したり、質問する子が多く、私の通っていた日本の学校では、積極的に何でもこなす子が目立ってしまうのに、ここでは逆に、私みたいな引っ込み思案な子が目立ってしまう。(中略)私も、自分の意見を皆にぶつかけたり、もっと自己主張ができるようにしたい。と思う。

そして次に、私が感心したことといえば、「良い人間関係が築けていることだろうか。皆、陰で悪口を言わず、仲間はずれにされたり、特別扱いされる子もいない。それに何だかんだ言って、男女共に仲がよい。(後略)』

異なる文化の中で育っているが故に、互いが影響し依存しあっていることを知っているという生活環境、異国というある意味不自由で苦しい環境にあるからこそ互いを認め合い、受け入

れ、その上でしっかり自分を主張するという態度、まさに今の地球に求められている共生的態度がここに見られる。保護者の方々や先生達の指導もさることながら、子供達がバラエティに富んだ経験の中において、違っていても当たり前互いの境遇で、国や人種、立場による考え方の違いを自然に受け入れ、他者とのかわり方を学んできていることが大きな要素になっているのだ。

シカゴに限らず、日本人学校は転出入が激しく、数年で半数以上の生徒が入れ替わってしまうのだが、日本の学校に戻っても、このような子供達が、その良さを失うことなく、発揮してもらいたい。日本の学校が、一人一人の良さを磨きあえる所であることを切に願う。

生徒達は、シカゴ日本人学校から卒業、転出し他国に行ったり、日本に帰国した後も、手紙や電話、今ではメールなどの通信手段を使って連絡を取り合い、いろいろな国や日本各地を結んで友達づきあいを続けている。小学生や中学生にして、日本全国そして全世界に自分たちだけのネットワークをもっているのだ。実にうらやましい話ではないだろうか。このような豊かな経験や、日本人学校での学びを生かし、子ども達が日本や国際社会に大きく貢献できる人間として育っていくことを願ってやまない。

4. おわりに

最後になってしまったが、ここまで書いてきたこと以外に、自分自身が今後も大事にしていきたいと思った経験を二つ紹介して本稿の結びとしたい。

ひとつ目は、いろいろと困った目にあいながらも、自分自身が豊かな異文化体験をできたことである。始めにも述べたとおり、アメリカについては自分が小中学生の頃からいろいろな情報に触れ、その文化にどっぷりと浸かってきたと思っていたし、いくつかの都市には旅行で訪れたこともあったため、アメリカの色々なこと

が当然分かっているものと思い込んでいた。しかし、実際に生活してみると分かっていないこと、勝手が違うことは意外に多く、毎日が異文化体験の連続であり、百聞は一見にしかずを実感したということである。結局、自分が知っていたのは、単なるアメリカのポップカルチャーに過ぎず、ニュースで見るほんのうわべの世界でしかなかったということだ。

アメリカそのものも異文化の国ならば、周りに暮らしている人たちとの関わりも、また強烈な異文化体験であった。左隣はアメリカ人の年配の女性が住んでいたが、右隣と私の住むタウンハウスの大家さんはロシア人、向かいにはポーランド人の家族が住んでいる。一件先の両隣は韓国人とウクライナ人だ。買い物に出れば店員にも買い物客にもインドやパキスタンの人たちが目立ち、各国の言葉や各国訛りの英語が飛び交っている。当然中南米諸国から来ている人たちはとてつもなく多く、スペイン語は第2国語のような状態になってしまっている。シカゴ日本人学校の用務員さんは3人もメキシコ人で、時々スペイン語を教えてくれ、私はお返しに日本語を教えてあげた。あいさつはいつも英語と日本語、スペイン語のチャンポンだった。



アメリカの大都市やその近郊で、私が日常よく行く場所は、アメリカ以外の国から来た人たちが多く異文化体験でいっぱいであった。こんな環境を受け入れて抱え込むアメリカの懐の深さに感心しながら、異なる文化的背景を持つ人たちを受け入れ尊重しながら関わっていく態度

を、少しずつでも身につけてこれたように思う。

ふたつ目は、図工美術（技術）の専科教員として配置されたことで、小学部1年生から中学部3年生まですべての学年を3年間教えられたということである。反面、担任が持てなかったのは非常に残念であったが、日本では本来中学校の教員である自分が、小さな1年生の授業も持つことができたことは、貴重な経験となった。どんな段階を経て子ども達の能力が発達していくのかがわかり、学年によってどのような教え方をしなければ理解されないのか。子どもの立場になって考えること、中学校であれば当然できることも教師の仕事として面倒見なければならぬ小学校特有の子どもへの配慮など、勉強になることが多かった。特に、小学部低学年を教えることの難しさや大変さを経験できたことは、自分にとって大きな宝物になった。



所属区分としては小学部に属することで、中学校にいるだけでは分からなかった小学校の先生たちの活動が良く見えたことも良かった。小学校の先生たちが何を大切にし、どんなことに工夫を凝らしながら頑張っているのか、小学校の特質や中学校との違いが実感できたことがとてもよかった。これもまた一つの異文化体験といえるだろうか。

異文化体験といえば、小学部の職員に限らず全国津々浦々から集まる力ある先生方と職場を共にさせていただいたことも大変勉強になり、少しずつ感じられる地方色が興味深い異文化体験となっていたと思う。

このようなシカゴでの3年間をこれからの教員生活の中に何らかの形で生かしていくことができれば幸いである。

なお、ここでは紹介しきれなかった詳しい活動の様子については、シカゴ日本人学校のホームページを是非ご覧いただきたい。各行事や授業の様子など、ふんだんに写真を使いながら、学校の様子を公開している。

忙しい中、先生たちが毎月当番を決めて更新を行っているホームページで、日本国内のどの学校と比べても見劣りしない、かなり豊かで充実した内容になっているので、是非楽しんで見ていただきたいと思う。

シカゴ日本人学校ホームページ

<http://www.chicagojs.com>

参考文献

- ・『小史「シカゴ双葉会日本語学校」』
早川昇
- ・「アメリカの教育 - 現地理解と新しい帰国子女教育のために - 」
松本輝彦
海外子女・帰国子女 2004 年秋版
- ・「アメリカの学校 - 規則と生活 - 」
高橋健男 三省堂
- ・2004 Plum Grove Junior High School
Assinment Notebook
- ・Plum Grove Junior High School Student &
Parent Handbook 2004-2005
- ・「私の視点 ウィークエンド」
明石要一 加藤十八
朝日新聞 2006 年 6 月 17 日土曜日
- ・「ゼロトランス - 規範意識をどう育てるか - 」
加藤十八 学事出版